金融論講義

日本大学教授
三浦　寛也　著

東　京
(株)　千　城

金融論講義　　¥2500

昭和54年4月5日　印　　刷
昭和54年4月23日　初版発行

著　者　三　浦　寛　也
発行者　先　生　重　雄
印刷所　㈱栄泰印刷
製本所　㈱小実製本印刷工場

発行所　株式会社　千　　城
東京都千代田区猿楽町1—4—12
TEL (291) 5214 自誠堂ビル
振替　東京8—3086番

はしがき

われわれの経済生活には各種の財と用役が必要である。その財や用役を得るためには，貨幣なり信用なりの購買力をもっていなければならない。したがって，経済社会における財の動きと資金の動きとは密接に関連しており，楯の両面にもたとえることができる。また貨幣は，財の生産・分配・交換・消費を円滑にする手段として機能するばかりでなく，経済の実体に大きな影響を与えている。すなわち，貨幣の流通そのものが財の需要量・供給量の変化をひき起こす要因ともなっている。貨幣や金融が経済社会の安定と発展に重要な役割を果たすとともに，経済社会を攪乱する要因ともなっていることは，周知のところである。それゆえ，経済の動きを知るためには，通貨制度，金融市場，金融機関，資金の循環，金融政策等についてのなんらかの知識をもつことが必要である。

本書は，貨幣と金融についての基礎的事項について，学生諸君にも容易に理解できるよう，わかりやすく述べたものである。なお，本書の前身は，田中五八教授との共著「金融論」という名称であったが，今日，全面的に改訂するにあたり，教授のご了解を得て，「金融論講義」と書名をかえ，私の著書として出版することとなった。

本書の出版にあたっては，（株）千城・先生重雄氏に大へんお世話になった。心からお礼を申し上げる次第である。また，印刷・校正を担当していただいた方々にも厚くお礼を申し上げたい。

昭和54年1月

著　　者

目　　次

はしがき

第1章　金融の概念……11

第1節　金融の意義……11

第2節　金融論の研究方法……13

1　社会現象……13

2　金融論の研究方法……14

第3節　経済学の発展と金融論……16

1　価格分析と所得分析……18

2　微視的分析と巨視的分析……19

3　静態的分析と動態的分析……19

第4節　金融の種類……21

1　消費金融と生産金融……21

2　短期金融と長期金融……21

3　農業金融・工業金融・商業金融……21

4　国内金融と国際金融……22

5　大企業金融と中小企業金融……22

6　直接金融と間接金融……23

7　自已金融と外部金融……23

8　動産金融と不動産金融……23

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第2章　金融市場……25

第1節　金融市場の意義……25

第2節　短期金融市場と長期金融市場……26

1　短期金融市場……26

2　長期金融市場……29

第3節　産業金融市場と消費金融市場……31

第4節　国内金融市場と国際金融市場……32

第5節　金融市場の変動……32

1　季節的変動……32

2　景気的変動……33

3　月中の変動……33

第3章　通貨制度……35

第1節　貨幣制度の発達……35

1　無交換時代……35

2　物々交換時代……35

3　貨幣経済時代……36

4　信用経済時代……38

第2節　貨幣の種類……38

1　発行主体による分類……38

2　形態による分類……39

3　強制通用力の有無による分類……40

第3章　貨幣の職能……40

1　一般的交換手段……41

2　価値尺度……41

はしがき

われわれの経済生活には各種の財と用役が必要である。その財や用役を得るためには，貨幣なり信用なりの購買力をもっていなければならない。したがって，経済社会における財の動きと資金の動きとは密接に関連しており，楯の両面にもたとえることができる。また貨幣は，財の生産・分配・交換・消費を円滑にする手段として機能するばかりでなく，経済の実体に大きな影響を与えている。すなわち，貨幣の流通そのものが財の需要量・供給量の変化をひき起こす要因ともなっている。貨幣や金融が経済社会の安定と発展に重要な役割を果たすとともに，経済社会を攪乱する要因ともなっていることは，周知のところである。それゆえ，経済の動きを知るためには，通貨制度，金融市場，金融機関，資金の循環，金融政策等についてのなんらかの知識をもつことが必要である。

本書は，貨幣と金融についての基礎的事項について，学生諸君にも容易に理解できるよう，わかりやすく述べたものである。なお，本書の前身は，田中五八教授との共著「金融論」という名称であったが，今日，全面的に改訂するにあたり，教授のご了解を得て，「金融論講義」と書名をかえ，私の著書として出版することとなった。

本書の出版にあたっては，（株）千城・先生重雄氏に大へんお世話になった。心からお礼を申し上げる次第である。また，印刷・校正を担当していただいた方々にも厚くお礼を申し上げたい。

昭和54年1月

著　　者

3　支払手段……41
4　価値の保蔵手段……41
5　繰延支払の標準……41
6　資本移転手段……42
第4節　貨幣の本質に関する学説……42
1　金属学説……42
2　名目学説……43
第5節　本位制度……44
1　本位制度の発達……44
2　本位制度の種類……45
第6節　通貨主義と銀行主義……49
1　地金論争……50
2　通貨主義と銀行主義……51
3　ピール条例……52
第7節　銀行券発行制度……53
1　分散発行制度と集中発行制度……53
2　保証準備……54
3　発券制度の分類……54

第4章　金融機関……58

第1節　金融機関の発達……58
1　ギリシア・ローマ時代の金融機関……58
2　中国の古代・中世における金融機関……59
3　近代における銀行の発達……59
4　日本における銀行の発達……63
第2節　金融機関の分類……66

第3節　金融機関の機能と信用創造……69
1　金融機関の機能……69
2　信用創造……71

第5章　日本銀行……76

第1節　日本銀行の沿革……76
第2節　日本銀行の機能……78
1　発券銀行としての機能……78
2　銀行の銀行としての機能……79
3　政府の銀行としての機能……79
第3節　日本銀行の運営組織……81
1　日本銀行政策委員会……81
2　日本銀行の執行機関……82
3　日本銀行の監督と監査……82
第4節　日本銀行の財政状態……82

第6章　普通銀行……84

第1節　普通銀行の種類と業況……84
1　都市銀行……84
2　地方銀行……85
第2節　銀行の業務……85
1　預金業務……85
2　貸出業務……88
3　為替業務……90
4　証券投資……91
5　その他の付随業務……92

第7章　各種の金融機関 ……95

第1節　長期信用銀行と信託銀行……95

1　長期信用銀行……95

2　信託銀行……96

第2節　中小企業金融機関……99

1　相互銀行……99

2　信用金庫と信用金庫連合会 ……100

3　信用協同組合と信用協同組合連合会 ……101

4　労働金庫と労働金庫連合会 ……102

5　商工組合中央金庫 ……103

第3節　農林漁業金融機関 ……104

1　農業協同組合と信用農業協同組合連合会 ……104

2　水産業協同組合 ……104

3　農林中央金庫 ……105

第4節　政府金融機関 ……105

1　資金運用部 ……105

2　日本開発銀行 ……107

3　日本輸出入銀行 ……107

4　国民金融公庫 ……108

5　中小企業金融公庫 ……108

6　農林漁業金融公庫 ……109

7　住宅金融公庫 ……109

8　公営企業金融公庫 ……110

9　医療金融公庫 ……110

10　北海道東北開発公庫 ……110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

11　環境衛生金融公庫 ……111
12　中小企業信用保険公庫 ……111
第5節　その他の金融機関 ……112
1　保険会社 ……112
2　証券会社 ……112
3　証巻金融会社 ……113

第8章　マネー・フロー分析……115

第1節　マネー・フロー表 ……115
第2節　直接金融の育成 ……122

第9章　金融政策 ……125

第1節　金融政策の意義 ……125
第2節　金融政策の目的 ……126
1　現代資本主義の二現象 ……126
2　金融政策の目的 ……129
第3節　金融政策の手段 ……130
1　金利政策 ……130
2　公開市場操作 ……131
3　支払準備率操作 ……133
4　貸出増加額規制 ……134
5　選択的信用統制 ……135

第10章　金融再編成 ……137

第1節　終戦から1954年までの日本経済と金融整備 ……137
第2節　1955年以後の日本経済と金融機構の発展 ……138

第3節　金融再編成の動き ……141

付録1　金融改革の構想 ……145

——自由で公正な仕組みをめざして——

付録2　資本市場対策への提言 ……177

——間接金融から直接金融へ——

付録3　関係法令抄 ……195

貨幣法（抄）　日本銀行法（抄）　銀行法（抄）　準備預金制度に関する法律（抄）　国際通貨基金協定（抄）　金融機関の合併及び転換に関する法律

参考文献 ……238

第1章　金融の概念

第1節　金融の意義

金融という言葉は，お金の融通という言葉から来ているが，一般的には，金融は，貨幣の貸借を意味している。すなわち，貨幣の余裕のある家計や企業あるいは政府から，貨幣を必要とする家計や企業あるいは政府への貨幣の融通を指称している。

金融という言葉と同じような意味をもつ外国語として，英語にはファイナンス (finance) とバンキング (banking) がある。finance は経済主体の貨幣の収入・管理を意味し，金融のみでなく，財政をも包含した意味をもっている。banking は，銀行を中心とする金融機関の受信活動や与信活動を意味している。ドイツ語の Finanz ・フランス語の finance も，英語の finance と同じような意味をもっている。

このように，金融という言葉は，個人なり企業なりあるいは政府のような経済主体の貨幣の貸借，貨幣の収入・管理・運用，または信用の受授等を意味しているが，われわれの生活している経済社会における金融をよりよく理解するためには，貸借の手段となる貨幣や信用，金融機関，金融機構，さらには経済循環と関連している資金の流通等についての認識が必要となってくる。

われわれの経済生活は，財あるいは用役の消費の連続である。消費は貨幣の支出によって可能となる。またの生産なり用役の提供は，貨幣——より正しくは購買手段というべきであろう——の獲得を目途としてなされている。

われわれは，購買手段——貨幣や信用——をもたなければ，消費財の購入や用役の提供を受けることはできない。現代の経済が貨幣経済とよばれるのは，財の生産・交換・分配・消費という経済の循環過程に貨幣が介在し，貨幣が経済循環を容易にし，消費はもちろん，生産にも，交換にも，分配にも，貨幣を必要としているからにほかならない。今日では，分業がきわめて進展し，人々は一業に従事することによって収入を得，その収入によって各種の消費物資を獲得し，生活している。この分業の発達が通貨制度ならびに信用制度の発展を促進し——通貨制度の発展が分業を促進された点も見のがすことはできないが——国民のほとんどが貨幣と，そして金融と何らかの関連をもちながら生活を営んでいる。国民経済における資金の循環は，人体における血液の循環にたとえることができる。血液の循環が，細胞に酸素を供給し，組織の機能や器官の機能を維持し，高め，人体の活動を可能にし，増進させるように，資金は経済の細胞ともいうべき家計と企業に対して，財の流通を可能にし，促進し，各産業の生産活動を増大させ，経済社会の活動を増大させる機能を果たしている。

このように，金融は生産や消費生産や消費と広範かつ密接な関連をもっているのであるが，金融論の対象としての金融とは何かということになると，適切な定義をくだすことは容易ではない。それは前述したように，金融ということを単に貨幣の貸借関係としてとらえるだけでなく，貸借手段としての貨幣，金融機関，金融機構等をはじめ，経済循環との関連における資金の流通，金融の経済の実体に及ぼす影響等についても把握する必要があるからである。これまで，金融とはいかなることかということについては，多くの学者によってそれぞれ定義がなされてきたが，必ずしも一致した考え方を示しているとはいいえない。それは，右に述べたように，その内容が広範にわたっていることにも一つの理由がある。金融とは何かという定義は，本書の最後で行うほうがより正確を期しうるものとも考えられるが，金融についての

研究を進めるに際し，おおよその概念を把握しておくこともまた必要なことは否定しがたい。そこで，おおまかながら金融とはどのようなことかといえば，つぎのようにいうことができよう。

「金融とは個別経済には，貨幣――より正しくは購買手段――の移転であり，総合経済的には，経済の循環過程における資金の流通である。」

家計なり，企業なり，国または地方公共団体なりの各経済主体の観点から，換言すれば，微視的に金融を考察するならば，各経済主体間における購買力，すなわち，現金通貨，預金通貨，および信用の移転であるということができる。また，総合経済的あるいは国民経済的な観点，換言すれば，巨視的に金融を考察するならば，生産，交換，分配，消費の経済循環過程におけるこれらとの関連をもつ資金の流通であるということができる。ここにいう資金とは，購買手段のもっている財または用役に対する支配力である。

今日では，金融を個別経済の立場から，たんなる貨幣の貸借として把握し，研究する微視的分析だけでなく，経済の循環過程における購買力を移転ないしは資金の流通として把握し，巨視的分析も行われるようになっている。

第2節　金融論の研究方法

社会科学（social science）とよばれるものは，一定の社会現象についての体系的知識をいうが，金融論が一個の学として成立するためには，認識の対象と方法が規定されなければならない。すなわち，社会現象を把握し，その現象のいかなる範疇（category）を研究対象とし，これをどのように分析し，どのような体系づけを行うかが課題となる。これらを論定するのが方法論である。

1　社会現象

人は他の多くの人々とともに団体生活を営んでいる。個人は，この団体の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com